

紹介する 実践研究	岡本真砂夫. (2020). 「プロソディ指導における楽器の活用—音響分析から記述した音節譜、フット譜—」 <i>JES Journal</i> , 20, 20-35.		
Doi	2021 年度公開予定		
紹介者	酒井英樹	更新年月	2020.09

JES Journal の 20 号が手元に届いてから、ずっと気になっていた論文を紹介します。20 号を手にとってページをめくった時に、「おおっ!、楽器のイラストがある!」と衝撃を受けました。ドラム、ボンゴ……。論文題目から英語の音声指導に関することは容易に想像できましたが、どのように楽器を使うのかが気になっていました。一方で、英語の音声を示すグラフが、難しい内容なのではないかという予感も感じさせました。しかし実際には、本論文は、わかりやすく書かれており、とても実践に役立つ内容でした。

小学校学習指導要領では、英語の特徴やきまりに関する事項の中で、「現代の標準的な発音」、「語と語の連結による音の変化」、「語や句、文における基本的な強勢」、「文における基本的なイントネーション」、「文における基本的な区切り」という音声に関する指導内容が示されています。本論文では、音声に関する事項のうち、音の変化、強勢、イントネーションなど英語のプロソディ（リズムとピッチ変化の組み合わせ）の指導方法が報告されています。

岡本氏は小学校の専科教員です。プロソディ指導の先行研究が提案するハミングや手拍子を用いた指導法を試しましたがうまく行かなかったことが報告されています。また、先行研究では文字のフォントを用いた指導も提案されていましたが、音声を十分指導した上で文字を扱う外国語科では利用できません。そこで楽器を活用することに考えつきます。指導にあたっては、音声分析ソフトである Praat や Prosogram を用いて、教材や英語母語話者、筆者自身の英語を分析し、音節譜（リズムと音の高低を示した譜）とフット譜（リズムの幅と、音の強弱を示した譜）を作成し、指導や児童の発話の特徴の評価に活用しました。

6 年生 5 クラスを対象に、9 月から 3 月まで、毎回 1~2 分程度、新出表現や既習表現の練習のために、楽器を用いた指導を行いました。指導内容は、(a) 母音挿入を防ぐこと、(b) 対比的焦点によるピッチ変化（A: How are you? B: I'm fine. How are you? というやり取りにおいて、A の発話では be 動詞に焦点が当てられ、are が高いピッチとなるのに対して、B の発話では you に焦点が当てられ、you が高いピッチとなるといった変化のこと）、(c) 開質問（wh 詞を用いた質問のこと）における文末ピッチでした。例えば、I like red. では、[lai-ku]と発音してしまいがちですが、like は一拍だけ楽器を打つことによって、母音挿入を防ぐようにしました。

その結果、児童のプロソディが改善された事例を示しています。また、アゴゴドラム、ボンゴ、カホン、ギロ、コントラバスといった楽器を用いましたが、アゴゴドラム、ボンゴ、カホンが好評であり、特にカホンを支持する児童が多かったと述べています。ギロは、リズムよりもピッチに意識が向きやすく、コントラバスは心地よいがリズムを認識しづらかったようです。

音声指導に関心のある方はぜひお読みいただきたいと思います。「自分も試してみたいな」というワクワク感を持てることでしょう。また、岡本氏の論文は、プロソディ指導の改善や理解を求めて、楽器や音声分析ソフトを利用して、児童の指導に当たっている点で、実践研究の典型であると言えます。実践研究のモデルとしても読んでいただきたい論文です。